

保育者を目指す学生の文章力を 高めるための取り組みについて

—保育実習 I と保育実習 II の実習日誌を比較して考える—

佐藤 達全¹⁾

The Measure for Heightening the Writing Ability of the Students Who Aim to Be a Childcare Person: Comparison between a Training Diary of Childcare Training I and that of Training II

Tatsuzen Sato¹⁾

Abstract

The sentences produced by students have many mistakes. The situation is getting severer. It is because the students have not mastered how to write sentences fundamentally. However, in order to become a childcare person, it is indispensable to master the capability to write sentences. So, in the lesson of Japanese Expressing Method III, the composition of 400 characters is imposed as weekly homework, and how to write sentences is practiced. It was verified how the capability to write sentences changed through the 15 lessons of creating sentences.

Key words: Writing ability, basic scholastic ability, learning attitude, learning habit, sense of purpose

キーワード: 文章表現力, 基礎学力, 学習態度, 学習習慣, 目的意識

1. はじめに (問題の方向性)

大学生の学力低下が指摘されるようになって久しい。大きな反響を呼んだ『分数ができない大学生』(岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄共著:東洋経済新報社)が出版されたのは平成11(1999)年6月のことである^(註1)。その頃、筆者は「国語表現演習」という授業を担当していたが、短大生の文章表現力の低下を危惧していた。それは、授業で接する短大生の中に正しい日本語の文章が書けない学生が年を追うごとに増加していたからである。そのことを指摘したのが「保育科学生

1) 育英短期大学保育学科

の文章表現力について」(『育英短期大学研究紀要第19号』平成14年2月発行)である。

この論文の中で、筆者は短大生の文章力が著しく低下してきた現実を紹介した。担当していた「国語表現演習」だけでなく、他の担当科目のレポートにも「気になる文章」が目立つようになってきたからである。拙論で具体的に指摘したのは次のような問題点である。

- ①主語と述語の関係が正しく対応してなくて、文章の構成が適切でない。
- ②助詞の使い方が適切でなく、正しい日本語の文章になっていない。
- ③話し言葉のまま書いている。

筆者が指摘した事柄は、文章を書く際に最も基本的なことである。それが身につけていない学生が増えてきたために「深刻な問題」と表現したのである。もちろん、そこではもっと多くの「気になる点」もあげておいた。それは、次のような事柄である。

- ①誤字や当て字が多い。(これはそれ以前から指摘されていた)
- ②「見れる」「食べれる」(いわゆる「ラ抜け言葉」)はもとよりのこと、「違く」「やっぱし」などの流行語が頻繁に用いられている。
- ③説明文(「私が思ったことは～」の場合、主語と述語が正しく対応していない文章(例えば、「私が思ったことは……と思いました」)を書く学生が非常に多い。
- ④語彙が乏しいため、ひとつの文の中で同じ形容詞や副詞を何度も繰り返して用いている。
- ⑤代名詞を用いて表現することがほとんどないため、同じものの名前や人の名前を何度も繰り返して書いている。
- ⑥文章が極端に長い(レポートの中に100字以上の文章がしばしば見られる)ため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続ける場合が多い。時には1つの文が200字～300字になる文章もある。
- ⑦800字程度のレポートを書くときに、段落をひとつもつけない学生が多い。
- ⑧文末表現がすべて「思います」や「でした」などワンパターンの場合も少なくない。

また、この頃から文章力と同様に気になることが目につくようになったため、それを⑨⑩のように指摘しておいた。

- ⑨推量表現(文末が「ではないでしょうか」)がほとんど見られない。これは、与えられることに慣れてしまった結果、想像力が乏しくなったからではないだろうか(註²⁾)。
- ⑩文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生も少なくない。常用漢字すら完全に覚えていない学生や、アクセントがおかしいために他の意味に受けとられかねない読み方をする学生が目立つ。

このように文章力について多くの点を指摘して、具体的な事例を紹介したのである。

2. 当時の授業での指導について

もちろん、学生の問題点を指摘するだけでは問題の解決にはつながらないから、国語表現演習の授業での取り組みやそれに対する学生の反応と15回の授業終了後の学生の変化についても報告した。その部分を次に示してみよう。

授業では、困ったときの参考になるように文章表現のテキストは用意したのだが、それを機械的に解説することはせず、毎週テーマを決めて400字の文章を書くことを課題とした。提出された文章を読み、誤字や表現の不適切なところを赤ペンでチェックして返却し、その中から例文として適当なものを例文集としてプリント・配布し授業中に学生と一緒に訂正した。

学生には半年の授業で課題文を10回提出してもらったが、不適切なところを指摘するだけで、訂正は学生に任せた。その理由は、他にも授業を担当しているうえに校務分掌もあるため、毎週150人の課題文をすべて訂正するだけの時間が取れないこともあるが、自分で直すことによって間違いをしっかりと認識してほしかったからである。なお、学生を激励する意味で、訂正すべき部分が少ない作文には学生の氏名の下に赤ペンで○をつけた。これは予想以上に好評であった。

第1回目の課題文を読むと、基本的な書き方の注意をしておいたにもかかわらず、予想していたとおりの間違い表現が数多く発見できた。このことから、一般論として指摘しても、自分のこととして意識しない学生が少なくないことが裏付けられた。

(前掲拙稿 〔3〕授業での取り組み)

現在、書店には文章が書けるようになるための多くの参考書が並んでいるが、筆者はこれまでの授業を担当した経験から、それを読んだからといってすぐに文章力が飛躍的に向上することは期待できないと考えている。

また、このような対応を試みたのは、文章を書く力は一朝一夕には身につかないからである。そこで、筆者は、就職した時に困らないだけの最低限の文章力をつけてほしいという願いから、学生と根比べをするつもりで向きあった。前掲論文にはその点について次のように示した。

初めは原稿用紙がチェックで真っ赤になる学生もかなりいて、落ち込む姿も見うけられたが、提出回数が増えるにつれてチェックされる場所は確実に少なくなっていった。もちろん、よく書けている文章には褒め言葉などを書き入れて激励したことは言うまでもない。(前掲拙稿)

そして、このような根比べの結果がどうなったかを次に示しておこう。

毎週、150枚の課題文(当時の学生数は約150人であった)を読むことはかなりの負担である。それでも、提出してもらった次の週には必ず返却することを実行した。それは、学生への質問から、小・中学校・高校時代の作文やレポートを提出した際の先生方の対応が必ずしも適切ではなかったと思われたからである。もちろん、課題文を毎週書くことに負担を感じる学生がいたことは否定できない。「なぜこんなことまでしなくてはならないのか」と不平を言う学生もいた。それでも、私は続けた。

チェックしたところを確実に訂正してもらうために、期末試験の代わりにレポートとして、すべての課題文を訂正して再提出してもらうことにした。(全学生で400字詰め原稿用紙にして1,500枚)を成績提出日までに読み返すことはさらに大変であった。しかし、チェックし

たところの多くが適切な表現に書き直されているのを見ると、心は軽くなった。

さらに、最終レポート（15回目：初めは10回の課題であったが、その後は毎週の提出で15回にした）には「課題文の添削指導を受けて思ったこと」という新たな課題文も提出してもらった。それを読むと、学生が短大に入学するまでに受けた文章を書くための指導の実態や学生の率直な感想があふれていた。そのいくつかを紹介しておこう（以下に示す学生の文章は、すべて原文のまま掲載）。

- * 小学校の頃から作文は何度も書いてきましたが、今まで添削をしてもらったという経験はあまりありませんでした。そして今回の授業で、どれほど自分が間違っていたかということがわかりました。
- * 自分が書いていた文章が、これほど間違っていたことは気づきませんでした。
- * 今まで作文を書いて先生に提出しても、○がついているだけだったりはんこが押してあるだけだったりで、添削していただいたことはありません。そのため、間違いを正しいと思いきみ、そのままにしていました。でも、この授業で直すことができ、本当によかったと思いました。

このように「添削を受けた経験がほとんどない」「文章の書き方の指導を受けたことがほとんどなかった」ので、自分の文章が間違っているという認識がほとんどない」という感想を書いた学生が非常に多かったことから、小中学校で文章を書く指導が十分に行われていないことが確かめられた。その中には、授業を担当する筆者の願いをしっかりと受けとめていると思われる感想も多いので紹介しておこう。

- * 文章を書いているときは自分の間違いにまったく気づかず、指摘されて、はっとすることがありました。
- * 私は文章を書くことが苦手でしたが、毎週書くことにより、少しずつ慣れてきたように思います。
- * 添削を受けてからは、直されたことなどを次からは注意して書くようになり、意識の持ち方が変わったような気がします。
- * これからは辞書をこまめに引くようにしたいと思います。
- * 添削をしていただいた文章を見ると、書く回数を重ねるにつれて間違いが少なくなっていくのわかりました。何度も書くことによって文章を書くことに慣れることは大事だと思います。
- * 先生は、頑張っ書こうという意欲を引き出してくださいました。先生は、よい文章が書けたら○をつけてくださるからです。毎週一週間前に書いた作文が返される時、緊張します。今日は○がついているといいな、という気持ちになり、見るのが楽しみです。
- * まだ、二つしか○をもらっていません。もっと文章力をつけて、いい文章が書けるように練習したいと思います。

- *漢字を間違えると、意味が変わってしまうので、気をつけようと思いました。
- *先生に添削していただいた作文を直してみると、少しの言葉の使い方や余分なところをなくすだけで、今までより文章の流れがスムーズになり、ないようもわかりやすくなって、自分の文章のどこが悪かったのか、間違っていたのかがわかりました。
- *小学校の頃から作文を書いているのに、書き方は全然進歩していませんでした。その原因は間違いを直そうとしなかったからだと思います。先生に直されているのに、書いたら終わりという状態で、返ってきた作文を読み返していませんでした。今回は、直されたところは絶対に訂正しなければならなかったので、自分の間違いに気づくこともできて、どう直せばよいのかもわかって、とてもよかったと思います。

もちろん、この感想は授業の最終レポートという位置づけでもあるため、そこに書かれている内容は多少差し引いて受けとめなければならないかもしれない。しかし、自分の勉強に対する取り組み方の問題点にしっかりと気づき、それを改善しようとしていることが伝わってくるものがあった。

3. 10年前の学生が書いた「おかしな文章」の例

すでに述べたように、筆者がこうした取り組みを始めた理由は、学生の文章力がかなり低下してきたと感じたからである。参考までに、前掲の拙稿から学生が書いた文章の一部を次に示してみよう（下線は筆者。以下すべて同様）。

- *先生がいろいろ配慮してくださり、少しずつ流れを把握できるよう指導してくれました。
- *これから保育者を目指す私にとって、正しい文章を書くということは、必要不可決です。
- *明るく元気いっばいに責極的に取り組んでいこうと、前向きな気持ちになりました。
- *先生は心良く引き受けてくださいました。
- *こうした光景は、園庭の広さが十分でない園では、なかなか見られないのではないと思われました。
- *注意をしたり叱ったあとには、必ずフォローが必要だと感じました。
- *先生方がとてもたくさんアドバイスをしてくださったり、私が失敗をしてしまったときも優しく励ましてくださったりよくしていただきました。
- *今回の幼稚園実習で、私が特に力を入れたことは、一年生の時にできなかったことがクリアできるように実習に臨みたいと思います。
- *よかったと思うことは、学校の授業で手遊びをしたので、とても役立ち、堂々とできました。
- *私がA園を志望した理由は、実習でお世話になり、園のようすや教育方針などがわかったので、この園を志望しました。
- *私がA園を志望したのは、のびのびしていて明るい保育園だと思いました。
- *ひとつの文に同じ言葉を繰り返し使われていました。

- *子どもたちを幅広い視野でいろんなことを見て多くを感じ学んでいきたいです。
- *今まで保育士になるためにいろいろな勉強や高校生の時からピアノを習い始めました。
- *実習をふり返ってみて少しではありますが、達成できたんじゃないかと思います。
- *一日の責任実習でも、半日実習の反省は少し活かされたけど、やっぱりうまくいきませんでした。
- *できあがったコマも子どもたち一人一人の個性が出ていて、いろいろなコマができあがりしました。

このような文章を相当数の学生が書いていて、訂正すべき部分がほとんどない学生は数えるほどしかいないのが現実で、文章を書く基本があまり身につけていないと言わざるを得ない。レポートや試験で書く文章に、基本的な間違いが非常に多くなったことが、国語表現演習の授業で作文の添削指導を始めたきっかけである。

ここで、現在の学生と比較して考察するために、20年前の学生が書いた作文について少し触れておきたい。筆者の手元には平成1年の夏季休業中の課題として1年生に提出してもらったレポートが保管してある（レポートの分量は1人あたり400字詰め原稿用紙で5枚～10枚：約150名分）が、そのレポートでは日本語としておかしい文章を書いている学生は一人もいなかった。あえて問題点を挙げるならば、誤字と当て字が数人の学生の作文に見られるだけである^(註3)。ところが、その後の学生が書く文章には年ごとに間違いが多くなってきたのである。こうした状況はなぜ起こってきたのであろうか。このことに対して、平成2年から始まった「ゆとり教育」が原因とする意見もある。また、少子化で高校や大学に入学することが容易になったためだという意見もある。

その原因を探すことも意味がないとは思わないが、ここではそのことを論ずることが目的ではないので、これ以上は踏みこまない。とにかく、短大の2年間で最低限の文章表現力を養うことと子どもの「言葉の先生」として正しい話し方や言葉遣いを身につけることが保育者には求められている^(註4)。

しかも、以前に講義形式で書き方や話し方の要点を説明する方法で授業を行ったことがあったが、ほとんど効果は上がらなかった。そこで、筆者は文章を書くことに関しては個別指導につながる添削指導を取り入れることにしたのである。その一方で、授業における取り組みと学生の反応等について、平成18年9月の「全国保育士養成協議会第45回研究大会」から第51回研究大会まで7年連続して口頭発表を行い、育英短期大学研究紀要にも第23号（平成18年3月発行）を皮切りに、これまで6回の報告を掲載してきた^(註5)。保育士養成協議会における口頭発表では、最初のうちはあまり関心を持たれなかったが、回を重ねるにつれて同様の問題を抱える大学（短大）が増えてきたためであろうか、関心の高まりが感じられた。もちろん、これは喜ばしいことではないのであるが。

4. 保育実習Ⅰの実習日誌に見られるおかしい文章

このような取り組みを10年以上も続けてきたのであるが、始めた頃はそれなりの効果があった

ものの、最近の状況はますます深刻になってきたと言わざるを得ない。正しい日本語の文章が書けない学生の割合が急激に増加しているだけでなく、正しい日本語を話せない学生も増加しているからである。そして、もっと憂慮すべきことは保育者を目指す学生として、文章力が必要なことや正しい日本語を話すことが子どもにとってどれだけ大切なことであるかが認識できない学生が多くなっていることであろう。

批判を承知であえて言うならば「小学生程度」の文章しか書けない学生や文章として成り立たない(主語と述語が繋がらない文章)「文章らしき日本語を並べただけ」という学生すら1クラス(50人弱)に何人も見かけるのである。現在の高等教育に関して「大学全入時代」と表現されることもあるくらいで、自分の名前さえ書ければ入学できると揶揄される大学や外国語(英語)の授業内容に「アルファベット」から学習することが明記されていて話題になった大学が存在すること等、大学の現状に関する多くの問題が指摘されている^(註6)。

こうした状況を踏まえた上で、保育者養成校の教員としては何とかして卒業生に対して最低限の文章力を修得させ、正しい日本語も話せるようにしなくてはならないと考えている。ただ、その道は10年前、20年前に比べると年々険しくなってきたと言わざるを得ない。それでも、卒業生を保育の現場に送り出す以上、何とかしなくてはならないとの思いは失いたくない。これから紹介するのは、平成26年度の2年生(約230名)の実態と、文章力向上に向けたささやかな取り組みの一端とその結果である。

まず、授業を始めるに当たって1年生の2月に行われた保育実習Ⅰの日記に書かれている文章をチェックした。次に示したのは、多くの学生の日記に見られた間違った表現の例の一部である。

- * 絵本を読んだときも、思ったより反応があつてとてもうれしかったです。
- * ピアノを弾いたとき、歌詞と楽譜が一緒に見れなくなってしまい、弾き歌いもうまくいかなかったです。
- * 子どもが楽しく歌えるようにピアノを弾きたいです。
- * 担任の先生に教えていただいたことを今後の活動に活かしていきたいです。
- * なので、これからたくさん言葉を学び、考えたことを文章で表現できるようにしたいです。
- * 先生が子どもに話していることの意味が考えられるようになりたいです。
- * 子どもたちから話しかけてくれたので、とてもうれしかったです。
- * 手遊びもすぐに思い出すことができず、先生に助けをもらい、とても情けなかつたです。
- * 言葉があまりしゃべれない子どもどのように関わったり、接したらよいか少しづつわかり、慣れてきて子どもたちもたくさん関わることができ、楽しかったです。
- * 先生の援助や言葉かけも注意して見れるように、余裕を持って実習を行いたいです。
- * 悔いの残らないよう、学べることはみんな学ばせてもらうつもりで実習に挑みたいです。
- * 日誌では言いたいことがまとめられず、ぐちゃぐちゃになってしまいました。
- * 今日は絵本や紙芝居や手遊びをやらせてもらいました。
- * 子どもと約束をしていても、おもちゃの取り合いになってしまうことが何度かあったけど、約束をするだけでケンカもすぐに終わるので、約束することが大切だと思いました。

- * 子どもへの声かけの仕方がやっぱり重要なんだと思いました。
- * やっぱりもっと上手に読めないと、子どもも飽きてしまうと感じました。
- * 同じ場面の所を何回も読むことで覚えていくんだなと思いました。
- * 今日の貴重な体験をこれから活かしていけたらいいなと思いました。
- * なので、しっかりしなくちゃなと思ったし、年長のクラスに対応できる言葉かけなどをしっかり学んでいきたいなと思いました。
- * 私がインフルエンザになったため、実習が長く延期してしまい、申し訳ありませんでした。
- * 園内には多くのアレルギーの子がいるみたいなので、間違ってアレルギーの食材が入らないように先生たちの対策がしっかりしているんだと思いました。
- * 紙芝居と絵本をやらせていただいたけど、思うようにできず反省をしました。
- * 子どもたちみんなの話をしっかりと聞いてあげられるようにするのは難しいことなんだと思いました。
- * 子どもも1回言われればわかるし、日々生長しているんだなと思いました。
- * ぬり絵などでは、3歳児と5歳児の差が見れたり、レゴブロックではさまざまな発想を考えていることに新めて感動しました。
- * 年長児は物事を判断したり言われたこともきちんと理解できる年齢だと感じました。
- * 子どもたちが楽しく歌えるようなピアノを弾いたり、子どもたちと一緒に歌えるように毎日の練習を欠かさないようにしようと決心しました。
- * 絵本を読むときや紙芝居を読むときに、もう少し抑揚をつけたり声色を変えてよめるようになりたいと思いました。
- * 雪かきをしていると、「頑張れー」などと子どもたちが声をかけてくれたり、励ましてもらって、子どもたちの優しさを改めて感じました。
- * 2歳児では、なぐり描きの子もいれば円を描いたり「お父さん、お母さん」と言って、絵で表現する子もいました。
- * 自分から責極的に行動できず、言われたことをするということが増かったので、自分に激しく行動していきたい。
- * 年長になるという気持ちが、子ども一人ひとりが持っているので、保育者は勇気づけたり頑張らせる言葉がけが大切だと思います。
- * 除々に実習も終わりに近づいていて寂しい気持ちになってきました。
- * 今日は散歩にも一緒に行くことができ、安全の配慮の先生方の対応などがたくさん見ることができました。
- * 実習をして思ったことは、まだまだ勉強や練習が足りていないと思いました。

具体例をあげていけばきりがなが、多くの学生の日誌に共通してみられた間違いを整理すると、次のような傾向があった。

- ①タラちゃん言葉（小学生の作文に多く見られる「頑張りたいです」や「難しかったです」）は40%近くの日誌に書かれている（この表現は、本来なら中学生くらいになるとほとんど「卒業」しているはずである）。

- ②「食べれる」「見れる」といった、いわゆる「ラ抜けことば」が非常に多い。むしろ、「ら」を入れて正しく書いている学生の方が少ない。
- ③話し言葉で書いている学生も50%近くに上る。その原因は、文章は話し言葉では書かないということを知らないだけでなく、あまり本を読まないため、書き言葉と話し言葉の区別ができない学生が少なくないことも影響しているのではないだろうか。
- ④漢字の間違いが非常に多い。また、指導の先生から間違いを指摘されているにもかかわらず、その後の日誌を書く際にも改善されない場合が少なくない。この原因は、戻ってきた日誌を丁寧に見直していないことが原因ではないだろうか。
- ⑤文章に段落をつけず、最後までびっしりと書いている学生が非常に多い。書くことに精一杯で、読みやすさにはまったく配慮していないことと、段落という概念がない学生も少なくないためであろう。
- ⑥普通の学生が話す言葉を聞いていると、いわゆる「タメ口」が多いが、そうした乱暴な言葉や雑な言葉の習慣が出てしまうのか、「紙芝居をやらせてもらう」「ピアノを弾かせてもらう」と書く学生も少なくない。
- ⑦文の最初に「なので」を使う学生が多い。「なので」は1語では用いられない言葉であることを理解していない学生が非常に多いためであろう。
- ⑧意味の違いを考えずに、次のような発音の同じ漢字を書いてしまう間違いが多い。
 <改に＝あらたに：新めて＝あらためて：感心をもつ・関心する：以外に思う：実習に望む：話しを聞く：責極的に行動する：初まる：完璧：向かえる：特意>

このような実習日誌の書き間違いは、保育実習Ⅰ（1年生の2月に実施）の日誌には非常に多く、11日間の実習日誌をすべて点検したところ、1日の活動をふり返って「実習生の反省と今後の課題」を書いた部分（A4の日誌の4分の3ほどのスペースで15行）では、全く訂正する必要のない日誌は全体の10パーセントほどしかなかった。

ただし、これはあくまでも文章表現についてだけで、日誌の中身に関しては評価を加えていない。90%ほどの日誌からは、何らかの書き間違いが見つかった。このような結果ではあったが、保育学科の学生は1年の前期と後期に「日本語の表現法Ⅰ」「日本語の表現法Ⅱ」という授業を必修で履修していることを付け加えておかなければならない。

5. 日本語の表現法Ⅲに向けて

そこで、2年生の前期に担当する「日本語の表現法Ⅲ」の授業を開始するに当たって、第1回目の授業で5月後半に予定されている2回目の幼稚園教育実習に向けての決意を「実習に向けて取り組んでいること」という題で400字の作文を提出してもらい、その文章の書き方をチェックすることにした。次に紹介する文章は、その作文から見つけた多くの学生に共通して見られた間違った書き方である。

*子どもたちの前でピアノを弾くので、自信を持って弾けるようにしていきたいです。

- *年長さんと遊んでみると、年中さんや年少さんとは違く、言葉がしっかりしているので戸惑うことが多く難しかったです。
- *実習が初まって実習日誌を書いたり、いつもよりもたくさん体力をつかうと思うので、それまでに体力をつけときたいです。
- *しっかりと準備をして実習に望めるようにしたいです。
- *不安がいっぱいだけど、向上心を持って前向きに実習に望みたいです。
- *子どもたちの心をつかむことは簡単なようで難しいです。
- *なにごとにも自分で考えたり、自分から行動するなどを毎日の生活から改善しようと取り組んでいます。
- *いつでも笑顔を忘れず、実習で色んなことを身につけるつもりです。
- *私はたくさんの本を読むようにしています。たくさんの本と出会うことで、絵本を読む力もつくし、いつどの場面でもどのような本をよめばいいのかわかってくるので継続していきます。
- *いくら意識していても、日常で使っている言葉は実習中に出してしまうと授業でも言われたし、自分でもそう感じています。だから、私は最近、乱暴な言葉や若者言葉を使わないように努力しています。
- *手遊びをたくさん覚えて、実習に活かすことができたらいいなと思いました。
- *私は実習先で一番不安なことは、子どもたちの発達を妨げてしまわないかということです。
- *なので、年齢別に平均的な発達のようなすを教科書で復習しました。
- *私は読み聞かせの練習をしています。どのように読めば子どもたちが集中してくれるかや、読み聞かせの前にする手遊びなど、友達や家族を相手に練習しています。
- *ふだんの生活で改めていることは、言葉遣いを意識したり体調を崩さないように規則正しい生活を送ったりしています。
- *実習に向けて取り組んでいることは、季節にあった幼児曲の練習を時間が空いているときにすることや手遊びのレパートリーを増やす努力をしています。

当然のことであるが、そこで見つけた間違いは、実習日誌に見られた書き方と共通していた。いわゆる「タラちゃんことば」も3分の1の学生の文章に見られた。また、文末に「思います」などの同じ表現を繰り返し用いていた学生もかなり見られ、原稿用紙に段落がひとつもない文章も15パーセントほど見られた。さらにカギ括弧の「」や句読点は、原稿用紙のマスの上には書かないことや、カギ括弧の「」をマスのいちばん下には書かないことを理解していない学生も20パーセントほどいた。

6. 日本語の表現法Ⅲでの取り組み

そこで、このような学生の実態を前提として2年生の前期で「日本語の表現法Ⅲ」の授業を進めるにあたり、学生の動機付けを試みた。その際に配布した「保育における話し方と書き方……子どもと保護者が心を共有するために……」と題する資料は次のようなものである。

【学生に示した資料】の紹介

1、はじめに

保育は「乳幼児を保護して育てること」です。その、乳幼児は、ポルトマン（スイスの動物学者）が「人間は生理的な早産である」と言ったように、人間以外のほ乳類に比べて著しく「未熟な」状態で生まれてきます。周囲の人の援助がなければ、一日たりとも生きていきません。それゆえに「保護」が不可欠なのですが、人間の赤ちゃんは「ただ保護されている」だけの存在ではなく、周囲の環境からさまざまな事柄を貪欲に吸収しながら「自立」に向かって歩み続けるのです。

それゆえ、子どもがどのような環境で生活するかということが、人間形成に大きな影響を与えます。将来を左右すると言っても良いくらいですが、その環境を構成するのが親であり保育者ですから、親や保育者が「(人的な)環境」にもなります。もちろん、子どもの「お友だち」も環境ですが、親や保育者の存在は環境としての意味がより大きいのです（親や保育者はまねされる存在ということ）。

そのため、子どもを育てる過程では保護者と保育者が子どもの育ちに関して共通の認識を持って連携することが重要になります。その際に、両者の共通認識を深める上で大きな役割を果たしているのが「ことば」なのです。言葉によって、子どもに対する「思い(心)」が共有されていると子どもは家庭の生活と保育園の生活を安心して営むことができます。ところが、両者の考えにずれが生じていると子どもは戸惑ってしまうでしょう（保育園で良しとすることと家庭で良しとすることが異なると、子どもは面喰らってしまいます）。

このように、保育という営みで大切なことのひとつは保護者と保育者の「思い(心)」が通いあうことです。もちろん、その前に「保育者と子どもの心が通いあうこと」と「保育者どうしの心が通いあうこと」が大切なことは言うまでもありません（そのためには、保育園と家庭が子育てに関して共通認識を持つことが必要です）。

ところが、最近では話すことが苦手な保育者も少なくないようですし、文章を書くことにはもっと多くの保育者が苦手意識を持っているのではないのでしょうか。

さらに、話すことはそれほど苦手とっていなくても、「正しい話し方」をしているという自信がある人はそれほど多くはないでしょう。

認識を共通にするための方法は、話して伝えることと文章で伝えること（連絡ノート）ですが、文章で書くことを苦手と感じている人は少なくありません。

一方、話すことは気にしていない人が少なくないでしょうが、学生や若い先生方と話していると、気になることがたくさんあります。先生方には正しい日本語を話してほしいのです。なぜかという、次のような理由からです。

保育者の「話し方」は、子どもがこれからの長い人生を生きていくためになくてはならない言葉を身につける際の「お手本」でもありますから、保育者は「正しい言葉」を話す責任があるのです（保育者は「子どもの言葉の教科書」です）。

そこで、この授業では「保育における話し方と書き方」というテーマで皆さんと一緒に学んでいきたいと思えます。

このよう内容を最初に話して、話し方や書き方の学習が保育者にとってどれほど大きな意味を持っているのかを理解してもらった上で、くにわ ぜんきゅう」という詩人^(註7)の次のような言葉を示した。

ひとつの言葉にキズついて
ひとつの言葉に後悔し
ひとつの言葉に気がついて
ひとつの言葉に励まされ
ひとつの言葉に涙ぐむ
そして ひとつの言葉で幸せになれた

この詩を紹介したのは、言葉には人の心を左右するほどの不思議な力・大きな力があることに気づいてほしかったからである。

その上で、テキストを配布した。その内容は、筆者が以前に保育系の雑誌に1年間連載した「話すことと書くこと」というものである^(註8)。それを毎回の授業で読んで文章を書く際の注意事項を学ぶとともに、話すことや文章が聞き手や読み手にどのような影響を与えるかを考えて、話し方や書き方に関心を持ってもらおうというねらいである。その項目は次のとおりである。

【テキストの項目について】

1、保育と言葉について考えてみましょう

①言葉には不思議な力がある

話し方や書き方は子どもの将来を左右するほど大切なもの

②保護者や子どもからの信頼を左右するもの

保育者の思いが正しく伝えられているかどうかを考えることが重要

③保育者は子どもに「正しい言葉」を伝える立場

幼稚園や保育園に教科書はない（先生の話し方が教科書です）

2、保育者は言葉に関心を持つことが必要です

それほど重要な立場なのです

①言葉に対する感性を磨きましょう

言葉のアクセントや発音に注意していますか

②流行語に飛びついていませんか

「楽しい先生」であるだけでなく「信頼される先生」になりましょう

③きれいな言葉をお話していますか

昔から「言葉は心の窓」と言われてきました

3、子どもと心を共有するための話し方

①侮れない子どもの感性

子どもは保育者の心を感じ取る天才

②本当に「子どもが好き」かどうかを検証する

子どもの名前を呼ぶときの要点

③口先だけの「子どもの目線になる」ではありませんか

担任の先生からの年賀状

④バイリンガルになりましょう

ふだんの言葉とよそ行き言葉

4、職員間で心を共有するための話し方と書き方

①信頼される保育は「協働」から

②保護者の信頼につながる園内の「共通認識」

③お互いの立場を尊重することと自分の責任を果たすこと

7. 日本語の表現法の進め方

資料の配付・解説に続いて授業の進め方を説明した。

授業の方法の柱は3つである。

①テキストを読んで文章を書くことや話すことの重要性や注意点に気づいてもらうこと。

テキストに用いた1年間の連載は毎回1,600字ほどの分量だったので、それを読んで説明する時間はそれほど多くはかからないため、毎回の内容に関連して、文を書くときや話すときの要点を盛りこんだ。

②学生が提出した課題文の中から教室で例示するためにふさわしい文章を集めて「例文集」を作って、一緒におかしな表現を探して訂正すること。

学生が毎週提出する400字の作文の中から間違いやすい文章を「例文集」(A4版で約15の例文を収録。15回の授業で10回くらい作成)として印刷・配布したものをを用いておかしな表現の部分を探すこととそれを訂正することを授業中に行った。

まず任意の学生を指名してプリントの文章から間違った表現の部分を答えてもらう。次に全員で正しい表現を考えるのである。その際に、自分から発言して答えた学生には点数をプラスする約束を最初にしておく。

考えることのトレーニングのため、指名されたときに「わかりません」と言った場合は減点する約束をしている。

③例文集に載せる文章は、毎週学生に自宅で書いて提出してもらう400字の課題文から選び出す。この課題文は、学生が「自分に目を向けるためのテーマ」と「社会に関心を持つためのテーマ」の二種類に設定し、授業終了時に課題を出して次の週に提出する。筆者はそれを添削して翌週に返却する。参考までに、平成26年度の作文の課題は次のようなものである。

- 第1回 教育実習に向けて取り組んでいること
- 第2回 新学期を迎えての決意
- 第3回 私の弱点とその克服法
- 第4回 少子化について思うこと
- 第5回 夫婦共働きについて考えること
- 第6回 教育実習のお礼状
- 第7回 社会人にとって敬語は必要か
- 第8回 実習を振り返って後輩に伝えたいこと
- 第9回 ○○の進路を希望する理由（○○に自分の進路を入れて書く）
- 第10回 幼児の虐待について思うこと
- 第11回 赤ちゃんポストの是非について
- 第12回 男女平等について思うこと
- 第13回 短大に入学して成長したこと
- 第14回 夏期休業中に取り組みたいこと
- 第15回 添削指導を受けて思ったことと今後の課題

その際に、訂正が必要な部分を赤ペンでチェックをするだけに留め、学生が自宅で訂正することを課題にしておく。もちろん、訂正方法がわからない場合はいつでも質問に来るように伝えている。よく書けている文章には赤で○をつけ、特に必要な場合は簡単に1～2行のコメントを書くこともある。

また、学生が訂正した作文は5回くらいまとまった時点で再提出してもらおう。最終的に訂正の仕方を期末試験の結果と総合して成績評価することを伝えておく。なお、課題文は連絡帳の文章を書くことを念頭に「です・ます調＝敬体」で書くように指示している。

前期の授業で15回の課題文を提出してもらおうが、すべての課題を提出した学生には基礎点として50点をつける。15回の課題が提出できない学生の基礎点は零点とすることを最初の授業で説明している。これは、苦手であってもこつこつと努力することの重要性を認識してもらうためであり、努力すれば報われることを体験してほしいからである。（この部分は特に重要なため、くり返し説明し、その後の授業でも何度も確認している。その理由は、こつこつと積み重ねることの意味に気づいてほしいからである）

もちろん、最初は提出しない学生がどのクラスにも数人はいる。おそらく中学校や高等学校で課題を提出しなくても通過してきた経験があるからであろう。しかし、筆者の授業ではそれを認めない。上手か下手かはともかく、とにかく15回の課題を提出するように促している。期末試験は満点が50点であるから、課題文が15回提出されなければ単位の認定はできないことになることを繰り返し説明している。

重要なことは、こつこつと粘り強く積み重ねる習慣を身につけることである。そうすることが仕事はもちろん、これからの人生を生きていく上で非常に重要と考えるからである。このようにすることで、学生は課題文を提出せざるを得ないだけでなく、自分が書いた文章の間違いと確実に向きあわざるを得ない。また、再提出するためにチェックされた部分を訂正しなくてはならな

いから、否応なしに学習することになるのである。

得意か不得意かに関わらず、「書くこと」と「読んでもらって間違いに気づくこと」と「間違いを自分で訂正すること」を繰り返すことでしか文章力を高めることはできない。毎週200枚以上の作文を読み続けることは決してたやすいことではないが、学生の学習意欲が低下しないようにするため、提出してもらった翌週には必ず返却することを実行してきた。その結果、担当者の本気度が伝わると学生もその気になることが確認できた。授業開始時に比べて、文章を書くことに対する意識は確実に変化していることが伺える。

もちろん、すでに紹介したように、個別の添削指導だけでなく、全体に周知確認しなくてはならない事柄も多い。そこで、教室では学生が書いた間違った表現を集めた「例文集」を一緒に読んで、間違い探しと訂正の仕方を練習し、必要に応じて正しい書き方を説明しているのである。たとえば、「タラちゃん言葉」のチェック法は次のようにしている。

〈例題〉しっかりと準備をして実習に望めるようにしたいです。

- * 「望める」が正しくは「臨める」であることは明らかなので、ここでは説明しない。
- * 「したいです」がなぜ間違いなのかかわからない学生は非常に多い。それは助動詞の「です」が「体言や一部の助詞などにつく」という「接続法」を多くの学生が覚えていないからである。ただ、接続法などという言葉を用いて説明してもすぐには理解できないため、授業では〈佐藤式間違い発見法〉として解説している。その方法は、「です」の代わりに同じ「断定」の意味を表す助動詞「だ」に置き換える方法である。

①臨めるようにしたいです → 臨めるようにしたいだ

②「だ」に置き換えておかしければ、「です」もおかしい表現と考える。

③「だ」に置き換えておかしくなければ「です」と書くことができる。

例えば「これはペンです」 → 「これはペンだ」……「です」の前の言葉が名詞ならば、「だ」に置き換えてもおかしくはないのである。

連絡帳に用いる「敬体」の文章表現で、文末を「です」にする場合は必ず「だ」に置き換えてチェックするように授業で繰り返していると、次第に学生の間に定着してくることが確認できた。

ただ、最近は小学生レベルの文章力も十分には身につけていない学生が増えてきたため、15回の授業の限界も感じるようになってきた。次に紹介するのは、平成26年度で前期に15回の日本語の表現法Ⅲを受けて夏季休業中に保育実習Ⅱを終了した学生の実習日誌の一部である。

8. 保育実習Ⅱと保育実習Ⅰの実習日誌に見られる文章の比較

- * 責任実習で作ったおもちゃで子どもが楽しんでいる姿を見られたことはとてもうれしかったです。
- * シール貼りをしましたが、一人でできない子が多かったです。
- * 最後に子どもが全員で答えてくれたり、しっかり参加してくれたのでとてもうれしかったです。

- * プールのようなすも見れてよかったです。
- * 積極的に質問し、多くのことを学びたいです。
- * パネルシアターなどもやらせていただくのでしっかり準備をして望みたいです。
- * 未満児と関わる際にはいろんなことが不安になるが、しっかりとかかわっていきたいです。
- * なので、適切な声かけをして子どもが納得できるような声かけを心がけたいです。
- * 今回の実習は前回の実習より、毎日課題を見つけたり改善することができた実習でした。
- * 責任実習では1日ではなかったのですが、給食から降園までをやらせてもらいました。
- * 午後に園庭整備をしました。これも子どもたちの安全につながっていくんだと思ったりと
てもうれしく感じました。
- * 年少さんを集中させるのはやっぱり大変なんだと改めて感じました。
- * 今日の実習をふり返って思ったことは、2歳児は本当に元気なんだと思ったことです。
- * 子どものことを考えるということはこうゆうことなんだなと思いました。
- * 本を読んでいるときにつかえてしまったり手遊びから上手に本に持っていけてなかった
り、もっと練習しないとだなと思いました。
- * その時に、この子にはこのタイミングがあったんだ、私がしつこく言うことでわなかった
なと思いました。
- * やっぱり元気がいいんだなと感じました。
- * 子どもと成長するってこういうことなのかと感じました。
- * その子にとって大切なことなんだと思いました。
- * もっとよく観察して、先生みたいに伝えられたり理解していきたいと思います。
- * 今回の実習は先生からアドバイスをもらい、とても勉強になる実習でした。
- * わからないことばかりで、次に何をするのかわからず、行動したり先生方の手伝いを
することができませんでした。
- * 毎日ふり返ることで、実習の目標が見つかることができました。
- * もっと前に聞いとけばよかったと反省しました。
- * お忙しい中、先生が細かな指示をしてくださったりしていただいて、充実した1日が過
せました。
- * 子どもたちやクラスの雰囲気が違く、観察しての収穫が多くありました。
- * 自分の判断の遅さに指摘されました。
- * 私は近所の子どもと遊んであげていたのですが、そのときお姉ちゃんのように感心や感
謝の言葉をかけられていました。
- * 実習では、絵本や手遊びをさせていただきました。
- * 私に不足していると思う点は、文章を書く力がついていないということを思いつきました。
- * 保育者は乳幼児に関わっていくためには、乳幼児の体や心についての知識が必要です。
- * 大学へ入学して幼児曲を弾いたときには、楽譜は簡単だったが、手が思い通りに動かなく、
なかなか伴奏が弾けませんでした。
- * 実習中は緊張して自分から行動できなかつたけど、これからはもっと積極てきに動けるよ
うにしたいです。

- * なぜなら、朝、子どもが挨拶したとき、先生が元気に挨拶しなかったら子どもが不安になります。だから、これからはしっかり挨拶ができるようにしたいです。
- * 先生方に言われたのは、季節や年齢によって接し方を考えるように言われました。
- * 普段から正しい日本語を使うようにしていると習慣ができるので、自然に正しい言葉が話せるようになるので、学校などでの会話には注意したいと思います。
- * 私に不足していることは、子どもに対する言葉がけ。ピアノの弾き歌い。年齢に応じた接し方などたくさんあります。
- * そのために、さらに勉強や実習を意欲的に取り組んでいければいいと思います。
- * 子どもに危ない目にあわせないように注意しなくてはいけません。
- * 子どもと接するときにどうゆう言葉を使ったらよいか、考えておかななくてはいけません。
- * 保育者は子どもの先を読み動くことができなければ子どもは守れないと思いました。
- * 私は実習中、一人の子が「先生、この花でっかいよ」と言いました。
- * 私は今回の実習を通して難しかったことは、年齢別の言葉かけや援助の仕方でした。
- * そのためには、もっとピアノの練習をしっかりとしたいと思えます。

保育実習Ⅰの日記に比べるとおかしな文章はかなり減少してきたことは確かである。半年間の添削指導の効果が多少は出ていると考えられるが、決して満足できる結果ではない。「タラちゃん言葉」や「たり」の使い方を間違えている文章も依然としてなくなっていない。また、「ラ抜け言葉」や「やらせてもらう」といった表現をしている学生や「話し言葉」で書いている学生も一定数存在する。さらに「なので」の使い方や漢字の間違い・送りがなの間違いもなくなっていないのである。

あえて「成果」をあげるならば、文章を書くことに対するアレルギーが確実に減少したことであろう。また、文章を書くときには読む人のことを考えて読みやすく書かなければいけないことが意識できたことであらう。そして、保育者が話す言葉が子どもに影響することにも気がついていくが、日常的に使っている自分の話し方を変えるところまでには到っていない。

残念ながら、授業の中で何度も説明したり添削指導を繰り返したりしてきたにもかかわらず、そうした間違いを改善できない学生の割合が以前に比べるとかなり多くなってきた。日記の内容はともかくとして、文章表現上でまったくチェックする必要のない日記は保育実習Ⅱでも、10パーセント程度に留まっている。このような学生の現状に対してどのように指導したら効果が出てくるのか、これからも考えてみなければならない。

9. 添削指導を受けた学生の感想から今後に向けて

ただ、夏季休業中に行われた保育実習Ⅱの前に前期の成績評価のために提出してもらった最終課題「添削指導を受けて思ったことと今後の課題」と題するレポートには、文章を書くことと話すことに対する学生の率直な感想が記されていて極めて興味深い。ほとんどの学生が共通した感想を書いているので、代表的なものを紹介しておこう。ただし、15回の授業を受けた後での最終課題文ではあるが、相変わらずほとんどの文章におかしな表現は見られる。文章力を向上させる

ことが一朝一夕にはできないことを物語っているが、そのことは伏せておいても、われわれに貴重な示唆を与えてくれるものである。

- * 私が今まで正しいと思って書いてきた文章には多くの間違いがあり、添削指導を受けるまでその文章を書いていたことにとっても恥ずかしさを感じました。
- * 文章は何度も書くことによって上達するものです。毎週作文を書いていて、書く速さや文章の構成力がだんだんと上達していることが目に見えてわかりました。
- * この指導は、文章力だけでなく、自分と向きあって考えたり知識を増やしたりすることにもつながりました。
- * 初めは内容を思い浮かんでもそれを文章にすることが難しく、時間もかかっていましたが、今はすぐに文章にできるようになりました。
- * 間違った文章を必ず直すことが次への上達につながったのだと思いました。
- * 今まで自分がまとまりのない文章を書いていたことを自覚するようになりました。自分がどこを間違えていたのかを理解することができたので、次回は間違えることがないように気をつけようと思いました。
- * これまでは自分が書いた文章の間違いを指摘されることがなかったので、とても勉強になりました。
- * これまで正しい日本語について考えたことはほとんどありませんでした。それは、心のどこかに「自分は日本人なのだから正しい日本語が使えて当然だ」という根拠のない自信を持っていたからだと思います。添削指導を受けるまでは、誰かに日本語の間違いを指摘されることがなかったのも理由の一つだと思います。添削指導を受けて初めて自分の日本語の能力と向きあい、少しではありますが改善できたように思います。
- * 赤ペンで修正していただいたところを見て、自分の間違いに気づきました。
- * 今まで毎週文章を書く課題をやってきて、自分の文章力のなさにショックを受けました。何回書いても○がもらえず、頭を抱えたこともありました。しかし、毎週先生に添削していただき、正しい文章の書き方がだんだんとわかるようになってきました。
- * 小学生の頃から国語の勉強が始まり、中学・高校でもしていました。それにもかかわらず、基礎がしっかりと身につけていないことを改めて実感しました。
- * 添削指導を受けて正しい日本語の使い方を初めて学びました。添削していただいた文章はすっきりとした美しい表現で、とても読みやすいものでした。
- * 添削指導を受けて思ったことは、添削された部分はきちんと読み返せば自分でもミスに気づくことができたということです。
- * 今回、添削指導を受けてからはタラちゃん言葉を使わなくなりました。何度も直していただくことで頭にしっかりと残ったからです。添削指導を受けずに保育者になっていたらと思うと、恥ずかしい気持ちになります。
- * 私が添削指導を受けて思ったことは、余計な文が多いということです。同じ文や言葉が何回も出てきていることに気づきました。長々と文をつなげるのではなく、わかりやすくまとめて書くことが大切だと思います。自分の文では伝えたいことがわかりにくくなってし

まっていることに気づいたので、今後も意識して文を書いていこうと思います。

最終回に提出してもらった文章を読むと、小学校以来の作文指導の問題点が浮かび上がってくる。それは、多くの学生が作文指導をほとんど受けてこなかったという現実である。もちろん、学生は小学校や中学校では学習指導要領に示された授業内容によって教育を受けてきたはずであるが、それがしっかりとすべての児童生徒に定着しているわけではない。少子化が進む一方で、高等教育機関の入学定員が増加している現状では、高等学校までに修得すべき基礎的な学力が定着していない生徒でも、大学や短期大学に入学しているため、学力格差が広がっている。

そうしたことも背景になって、最近では主に AO 入試や推薦入試の合格者を対象とした「入学前教育」が多くの大学や短大で行われるようになってきた。しかし、それだけでは対応できない状況になっていると考えられる。特に読み書きは「すべての学習の土台」なのであるから、小学校から高校までの教育のあり方を視野に入れた根本的な改革が必要になっていると言えるのではないだろうか。

(註1) 『分数ができない大学生』の中で著者は「問題の原因は大学教育だけにとどまらず、小学校から大学までが、互いに影響しあっていると感じてきました。そこで、各大学の先生方、それも何らかの形で数学教育に関係する先生方を中心として、企業や研究所の方にも参加していただき、外国と比較しつつ、日本の大学生の学力の現状を議論することで、今後の教育の方向を読者の方々に考えていただけるように、本書を企画しました」と述べているが、……この指摘は当然のことである。それは、学習は基礎の積み重ねであるのだから。

そして、さらに次のようにも述べている。「ここで分数を取り上げたのは、状況がわかりやすいからということもあります。同じような問題は、中学校・高校の数学、英語や国語そして他の科目でも起こっています。つまり、基礎科目全体の学力が低下しているのです。(中略) とくに、〈読み、書き、そろばん〉と言われる基礎科目、そのひとつである算数と数学をおろそかにしたことの後世への影響はより深刻です。このことをぜひ多くの方に考えていただき、日本の将来とそれを担うべき若者へ何を残すべきかの議論の材料になれば、私たち執筆者にとって望外の幸せです」(いずれも「はじめに」の部分)

(註2) このことに関して、立教大学教授・香山リカは精神科医の立場から「抽象的な思考力を失う若者の具体病」として「具体的な名詞や情報のみで会話が進むことの心地よさから抜け出せなくなり、物事を抽象的に考える力が失われてしまう」と述べている。(読売新聞 1998年4月27日)

(註3) このことについては拙稿「保育科学生の記事表現力低下の原因と対応」(育英短期大学研究紀要第31号：2014年3月でも触れた)

(註4) 話すことや書くことに関して保育者に求められるのは次の2つである。

①正しい文章表現をする力(理由は保護者と連絡ノート等で子どもや保育に関する情報を共有する必要があり、そのことが保護者の信頼にもつながる。保育の計画や記録を書く必要があり、公文書として園で保管するものもある)

②正しい日本語を話す力(保育者は子どもの「言葉の先生」としての責任も負っている)

(註5) 全国保育士養成協議会の研究大会における発表と育英短期大学に掲載した報告のテーマについては、拙稿「保育科学生の記事力低下の原因と対応」(育英短期大学研究紀要第31号：前掲)の註に一覧を紹介しておいた。

(註6) 少子化時代になって小中高校生が減少し、大学に入学を希望する高校生が減っているにもかかわらず、

大学の数は逆に増えているという現実がある。そのため、大学生の学力に関する見解が雑誌の記事や論文・書籍等で数多く発信されている。中には『名ばかり大学生』（光文社新書）『最高学府はバカだらけ』（光文社新書）『アホ大学のバカ学生』（光文社新書）『下流大学が日本を滅ぼす』（ベスト新書）『なぜ日本の大学生は世界でいちばん勉強しないのか』（東洋経済）といった衝撃的な書名の本も少なくない。

- (註7) 愛知県南知多町生まれ。1991年に故郷にアトリエを設立し、創作活動を始める。石の鳥や流木造形・砂絵などで知られ、その絵はカレンダーやポスターなどに多く用いられている。主な著書は『ありがとうの心』『まあるい心』『だいじょうぶ』など)
- (註8) 拙稿「話すことと書くこと」(『月刊仏教保育カリキュラム』平成23年4月号～24年3月号に連載：公益社団法人日本仏教保育協会発行)

(2015年2月5日受理)